OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	加齢と補償方略に関する研究 : 日常場面と交通場面における検討
Author(s)	蓮花, のぞみ
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24573
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【10】

氏名	蓮花（れんげ） のぞみ
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　25301　号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	加齢と補償方略に関する研究　―日常場面と交通場面における検討―
論文審査委員	（主査） 教　授　臼井伸之介 （副査） 教　授　佐藤　眞一　　准教授　篠原　一光

論文内容の要旨

高齢期は，様々な機能の低下や喪失を経験する年代といえる．しかしながら，多くの健常な高齢者は実際に日常生活を送る上でその変化に適応するために補償方略によって機能低下を補っていることが考えられる．従来の研究は，加齢に伴う機能変化に着目した検証が中心となっており，加齢に伴って補償方略を獲得するという側面に着目した実証的研究は未だ不十分である．高齢期に自立した生活を送るためには，加齢による機能低下の影響を補償して，加齢に伴うリスクを低減する必要がある．したがって，本研究では補償方略の利用実態を調べた上で，加齢に伴う機能低下と補償方略の関連を定量的に検証することを目的とした．研究では，高齢者が自立した日常生活を送る上で不可欠な二つの場面に焦点を当てた．研究Ⅰとして，普段の生活全般である日常場面に焦点を当て，「し忘れ」という展望的記憶のエラー防止に関する記憶補償方略の効果を検討した．研究Ⅱとして，高齢ドライバーの事故の増加に伴い解決が急を要する交通場面に焦点を当て，高齢ドライバーの事故防止に関する運転補償方略の効果を検討した．

研究Ⅰ　第3章では若年者と高齢者を対象に質問紙調査を実施し，高齢者がし忘れ防止のために利用している内的方略と外的方略に着目した記憶方略の利用頻度の年齢差を検討した．従来は，高齢者は外的方略の利用が多いために日常場面の記憶の失敗が少ないと述べられてきたが，分析の結果，高齢者は外的方略の中でも手帳などの利用は多いものの，アラームや他者に頼るといった方略の利用は少ないことが明らかとなった．さらに，方略を利用する背景要因を検討した結果，高齢者において，自己評価の低下が利用を促進していることが明らかとなった．また，忙しさや不規則な生活などの生活特性や性格特性の影響も大きいことが示された．第4章では高齢者を対象に実験調査を実施し，依存方略，時間方略，努力方略を含めた，より幅広い記憶補償方略を用いて，展望的記憶パフォーマンスと記憶補償方略の関係を検討した．外的方略のみ実験操作を行った結果，外的方略は展望的記憶パフォーマンスに対して補償効果があることが実証された．さらに，普段内的方略や努力方略を利用している者ほど成績が良いことが示唆された一方，普段依存方略や時間方略を利用している人ほど展望的記憶の成績が低いことが示され，普段用いている方略によってし忘れに対する補償効果の違いがあることがわかった．

研究Ⅱ　第7章では高齢ドライバーと非高齢ドライバーを対象に走行実験を実施した．その結果，高齢ドライバーは，負荷の高い交差点において偏った確認行動や，加減速の遅れ，速度の減速が不十分といった高齢ドライバー群特有の行動を示すことがわかった．第8章では高齢者講習受講者を対象に質問紙調査を実施し，高齢ドライバーの運転補償方略の利用頻度を検討した結果，多くが運転補償方略を意識的に用いていることがわかった．また運転補償方略の利用に自己評価が与える影響を検討した結果，自己評価が低下することで補償方略を行うことが想定されていたが，速度や確認に関して相反する結果が得られた．さらに，運転補償方略によって事故及び違反防止に一定の効果が認められた．第9章では，高齢ドライバー群と非高齢ドライバー群を対象に走行実験を実施した結果，加齢に伴う運転技能の低下は高齢期以前から現れていることが示唆された．また運転行動に認知機能が与える影響としては処理速度の影響が大きく，二重作業と関連が大きい注意機能とワーキングメモリの低下が，交差点におけるハンドル操作や確認に影響を与えていた．さらに，高齢ドライバーは運転行動が劣っている人ほどの補償方略を行う一方，非高齢ドライバーは運転行動が優れている人ほど補償方略を行う傾向が示された．

最後に，第11章では研究Ⅰと研究Ⅱの調査及び実験をまとめ，高齢期にとって，安全で活動性が維持され，自立した生活を送ることができる社会の実現に向けた提言を述べた．

論文審査の結果の要旨

高齢期は様々な機能の低下や喪失を経験する年代と言える。しかし多くの健常な高齢者は実際に日常生活を送る上で、その変化に適応するための補償方略（例えば夜間は運転を控えるなど）により機能低下を補っていると考えられる。従来の高齢者研究は加齢に伴う機能変化に着目した研究が中心であり、補償方略の観点から高齢者問題を実証的に検討した研究は数少ないと言える。そこで本研究は高齢者が自立した生活を送る上で不可欠な２つの場面、すなわち日常の展望的記憶（し忘れ）に焦点を当てた「研究Ⅰ、日常場面」と、近年事故多発が問題となっている「研究Ⅱ、自動車運転場面」の二つの場面の補償方略について検討した。

研究Ⅰ第3章では、高齢者がし忘れ防止のために利用している記憶方略の利用頻度やそれを利用する理由を明らかにするため、高齢者1,439名と若年者434名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、高齢者は記憶補助を利用するという外的方略の中でも手帳の利用は多いが、アラームや他者に頼るという方略の利用は少ないこと、さらに高齢者は主に自己評価の低下が種々の方略の利用を促進していることが明らかとなった。第4章では高齢者151名を対象に、展望的記憶を測定する課題であるVirtual Week日本語版を用いた実験を実施し、普段利用している補償方略の種類と実験パフォーマンスとの関係を検討した。その結果、普段から内的方略や努力方略を用いる高齢者ほど実験成績は良かった一方、他者に頼るなどの依存方略や、時間をかけて覚えるなどの時間方略を用いる高齢者ほど実験成績が悪く、普段利用する補償方略の種類と実行動パフォーマンスの間には関係があることが明らかにされた。

研究Ⅱ第7章では高齢ドライバーの運転行動の特徴および運転自己評価との関係を検討するために、高齢者27名と非高齢者20名を対象に実走行実験を実施した。その結果、高齢者の運転行動には確認回数の少なさ、左右の確認方向の偏り、加減速の遅れなどのリスク要因が見出され、また高齢者において自己評価が高い者ほど確認回数が少ないという不安全行動をとっており、自己評価と実行動パフォーマンス間の乖離が明らかとなった。第9章では認知機能、補償方略、運転自己評価の関係をさらに検討するため、高齢者35名と非高齢者34名を対象に実走行実験を実施した。その結果、認知機能の中でも処理速度の遅れが運転行動に与える負の影響が大きいこと、また高齢者は普段補償方略を用いる人ほど運転行動は劣るが、逆に非高齢者は方略を用いる人ほど運転行動が優れるという、年齢で方略利用の意味が異なることが明らかになった。

日常、交通場面ともに加齢の影響は大きいものの、展望的記憶に関しては種々の補償方略の効果的な利用から、普段の生活の中ではエラーがある程度防止されているが、運転行動に関しては自己評価と実行動の乖離等から補償がうまく働いていない場面が多いと考えられる。そこで第11章まとめでは本研究結果を踏まえて、補償方略を有効に活用するための具体的対策、および高齢者が自立した生活を送ることができる社会の創造に向けての提言を行った。

以上、高齢者の補償方略に焦点を当て、その有効性や問題点を実証的に検討し、重要な知見を多く得ることができた本論文は、今後の加齢研究、および来るべき超高齢社会に多大に寄与するものと高く評価され、博士（人間科学）の学位授与に値するものと判定された。